

MBAコースの成功を 本学100周年記念の 目玉にしよう



元日本オラクル社長
財団法人緑丘会副理事長
佐野 力



先週、MBAのための「財務会計」と「ケース分析」という小冊子入手した。いずれも小樽商科大学ビジネス・スクール編となっている。読み易くきちんとまとめている。企業のアカウンタビリティ、責任と監査、将来キャッシュ・フロー、グローバル会計原則等適切な実例を入れて紹介している。「ケース分析」もヤマト運輸の実例をもとに分析・代替案・実行プランが見事にプレゼンテーションされている。MBAコースでは何をどのように教えるのかが簡単に理解できた。著者の先生方の新時代への挑戦と意気込みが伝わってきた。MBAのための「ビジネス・プラン」が次に発行予定とのこと大いに期待している。

ビジネス・プランの成否ですべてが決まる

私事で恐縮だが13年前にITのベンチャー企業オラクル日本代表を引受けた。社員はわずか5人だった。しかしIT産業が新ソフトにより、革命的に変わることを、オラクルの製品は日本の産業が最も必要としていることを直感したので迷いはなかった。退職金でこの会社の株を買い退路を断った。3年の苦勞のすえ、マーケットシェア・成長率・利益率に関するビジネス・プランを作成し、米国本社幹部の前でプ

レゼンテーションをした。社長がまるでハーバード・ビジネス・スクールのケースそのものだと絶賛してくれた。以後これはジャパンモデルとして世界中のオラクルの経営見本となった。日本オラクルは5人の社員が10年間で1500人と成長し、外資でありながら東証一部に上場し、4万人の株主のいる日本の会社になった。先日発表の決算でも経営利益33%、税引後利益19%、1株当たり配当125円を達成している。野心的なプランを完遂すれば、世界的評価と賞賛と、目のくらむような報酬が手に入ることを体験した。

本学の伝統とMBAスクールの関係

今から93年前の1911年（明治44年）に72名の新生徒でスタートした時、教授は6名、助教授は3名であった。今のMBAコースの教授陣よりはるかに少ない数であったが、高い理想に燃えていた。旧世界の「土農工商」を逆転する、つまり「商農工士」で建国をする。「商」による新しい職業理念とその実践を通して品格のある、倫理形成をした実業人を育てるというものであった。また第二次大戦後の混乱期に、北大との合併というGHQの方針に対し、学校・小樽市・同窓会が一丸となって立上り、凄まじい大学昇格の闘争を展開した。資源のない日本は経済よりも輸出で発展する、その為にも国立唯一の商科単科大学として国家の再建に尽くすというものであった。結果はGHQより「小樽は個性豊かな学校なので単科（商）でその特色を伸ばせ」という決定を勝取った。同窓会は大学としての整備のため、寄付金、寄贈講座を用意し充実に協力した。これにより多くの優れた人材が輩出されたのである。

社会はMBAを必要としている

ビジネススクールからは、独立したベンチャー企業の成功者が続々と生まれて欲しい。しかし企業内での新規事業や戦略的子会社の立上げ、企業そのもののリストラ等のイントラプレナー（企業革新型ベンチャー）といわれるものの必要性もますます大きくなってきている。今までの日本株式会社の成功が、集団・経験・現場の重視とTQCに見られるシコシコ改善などであった。しかし急激に変化するグローバル化やIT革命の大波の時代にはより戦略的に予測不可の世界を経営する「実践型・専門家」を早く養成することが大切である。分野も行政・教育・NPOなどあらゆる組織でこのMBAが必要とされている。

ちょうど93年前の創立期や戦後の大学昇格期のような大飛躍の時がまさにきている。同窓会としても今回のMBAスクールにはできる限りの協力を惜しまない。あと7年の2011年には本学は100周年をむかえる。この100周年を個性豊かな大学として「商」とその「実践」によるMBAコースの成功をもって飾りたいものである。